

令和元年度あきた型学校評価

(1)豊かな教育のある学校の実現

評価領域	豊かな教育
------	-------

重点目標	新学習指導要領の趣旨や「キャリア教育全体計画」に基づき、児童生徒が何を身に付けるのかを明確にした授業実践。	P
現 状	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育全体計画を基に立てた年間指導計画に従い学部毎に指導しているが、学部の接続をさらに緊密にしていく必要がある。 地域の教育資源を活用した学習が増えてきているが、精選する時期にきている。 卒業後を見据えて発達段階や生活年齢に応じた学習活動を充実させていく必要がある。 	
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> 社会的、職業的自立に必要な力を育成するために地域の教育資源を活用し、小学部、中学部、高等部を一貫した教育活動を推進する。 	
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> 新学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童生徒理解に基づく指導目標と学習活動を明確にし、授業実践と評価を行う。 教育課程検討委員会を計画的に実施する。 学校としての一貫性や各学部の特色を明確にし、活動の状況や課題と成果を確認する。 地域との連携を基にした実践的な職業教育の充実を図る。 教育資源やそれを活用した教育活動を整理し全教職員で情報を共有する。 	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 生活単元学習について、授業の構想段階から、子ども理解ミーティングや単元デザイン、評価等授業に関する話し合い（ベースミーティング）を重ね授業実践を行った。 キャリア教育の視点から授業づくり、教育課程の検討を行った。 地域の教育資源の活用や地域と連携した職業教育については関係者間で連携しながら積極的に活動を展開した。 	D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 研究会等を通して授業実践を行うことで、児童生徒が自分から行動したり、友達と関わりながら活動に向かう姿が多く見られるようになった。 教育課程検討委員会で各学部の特色を明確にし、来年度の方向性を確認することができた。 地域との連携を図りながら、幅広く様々な取組を実践した。 	
自己評価	<p style="text-align: center;">B</p> <ul style="list-style-type: none"> 小中高の一貫性について、全校研究会等で視点を明確にした協議するなどして共通理解できる工夫が必要である。 地域での活動は、児童生徒の満足感、達成感のある活動が多かったが、児童生徒の目標と整合性に課題がある活動もあった。 	C
<p>↑ 評価基準 ↓</p> <p>A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない</p>		
学校関係者評価と意見	<p style="text-align: center;">A</p> <ul style="list-style-type: none"> キャリア教育の視点を踏まえながらこれからも地域資源を活用して、地域で自然に溶け合うような活動をしていく。また高等部生には身だしなみ、衛生面、人の関わり方など社会参加に向けたマナー等も教えていことも大事なキャリア教育である。 	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育全体計画を見直し、学校としての一貫性を明確にしそれぞれの発達段階に応じた効果的な教育活動や授業実践を推進していく。 児童生徒の実態に合った地域活動ができるように、活動の内容を見直したり精選したりする。 	

(2)豊かな地域生活への支援

評価領域	地域支援・地域交流
------	-----------

重点目標	児童生徒が地域で共に生きる力の基礎を培うための、居住地校交流や学校間交流、地域との交流活動の充実と深化。		P
現状	<ul style="list-style-type: none"> 小学部、中学部それぞれの段階に適した学校間交流を継続する必要がある。高等部では近隣の高等学校との交流および共同学習の進め方が課題である。 中学部の居住地校交流については小学部での実績を基に、地域の中学校でも継続できるように働きかける必要がある。 		
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> 小学部、中学部、高等部それぞれ特色のある交流及び共同学習を実施する。 交流相手校からの評価を生かしながら交流及び共同学習を充実させる。 地域の学校における障害理解授業の拡充を図る。 		
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> 交流及び共同学習、居住地校交流について達成状況や課題を把握するための評価の在り方を見直す。 広報や地域行事への参加、地域での活動等により、地域に対して積極的に本校の教育活動を発信すると共に、地域からの評価について情報収集をする。 児童生徒が居住する地区の学校のニーズに応じた障害理解授業を実施する。 		
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 長年継続してきた小学部の実践をもとに中学校での居住地校交流に取り組んだ。 中・高等部では地域での社会貢献活動に取り組んだ。 ホームページの迅速な更新や各種の通信による発信の他、報道機関への情報提供を積極的に行った。 居住地校交流を実施する前に障害理解授業を実施することで、交流内容が充実した。 		D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 学校間交流22回、居住地校交流小学校27回、中学校7回、地域との交流活動38回、9校での障害理解授業を実施した。 障害理解授業を実施することで、必然性をもった交流ができるようになり児童生徒が主体的に活動できるようになってきている。 		
自己評価	B	<ul style="list-style-type: none"> 様々な交流活動に継続して取り組むことで、関係性は深まってきているが、交流から何を学ぶかを明確にして、一人一人の目標が達成できる活動を精選していく必要がある。 	C
	↑ 評価基準 ↓	<p>A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた</p> <p>B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない</p> <p>C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない</p>	
学校関係者評価と意見	A	<ul style="list-style-type: none"> 社会へ出るステップとして同世代交流を大切にしてほしい。互いの児童生徒同士がうまく交流できることが自信になり社会自立につながっていく。障害理解授業等を通して障害に関する情報をたくさん発信してほしい。 	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<ul style="list-style-type: none"> これまでの実績の成果と課題を整理し更なる充実を目指す。 小学部での居住地校交流の実践が地域の中学校でも継続できるようにする。さらに高等部と地域の高校との交流を推進し、障害理解授業等を通して障害等に関する情報や活動の様子を発信していく。 		A